繊維のふるさとシリーズ

愛知県の伝統染織について

堀 江 勤之助

1. はじめに

工業生産では全国のうちでも順位の高い愛知県の昭和55年度の生産動態統計についてみると、自動車などの輸送機器が県内全生産の31.3%を占め、ついで鉄鋼製品9.6%、機械8.8%、食糧品7.3%となり、繊維製品は7.2%で、前年より少々低下している。

県内工業の従業員数は、輸送機器の16万人が首位で、全体の18.6%を占め、ついで繊維製品の従業員が13.4万人で15.0%となり、愛知県では繊維産業がまだ大きい地位を占めている。また全国の繊維産業からみた愛知県の比率は、昭和55年度の生産額の工業統計でみると、全国比は綿糸紡績が22.8%、毛紡績が28.7%、綿、スフ織物13.8%、毛織物65.5%で、国内でも有数の繊維産業地帯である。

このような繊維産業の愛知県での発達には、明治11年に官営の愛知紡績所が設置されたり、繊維工場の立地条件が良好であっただけでなく、当地方では古くより、染色や織物の記録もあり、生産が行なわれていたことが知られている。正倉院文書のうち、天平6年(734)の尾張国正統帳(おわりのくにしょうぜいちょう)には、錦や綾織の織機の修理について述べている。

また延喜式(927)には尾張、三河より練糸、白糸等の貢納があったことを記述している。永延2年(988)の尾張国郡司百姓等解文(げぶん)によると、藤原元命(もとなが)の不当な増税や横領等を政府に訴えたが、その文書の31か条の中に、調絹(みつぎの絹)、美糸(うまいと)養蚕などの項があり、当地の織物の盛んであったことがわかる。

このように愛知県内で生産の多かった絹は、江戸時代までで現在は非常に少なくなっている。絹織物の遺品の

うち著名なものは、熱田神宮にある長祿2年(1458)に足利義政が献じたとされる。表着、重桂(かさねうちぎ)、単(ひとえ)、入帷(いりかたびら)、表袴などがあり、徳川美術館にも歴代の藩主等の衣服がある。

今回はこれらについては述べないで、江戸時代より一般庶民と関係の多い麻、綿織物と染色、刺繍について現在の愛知県の伝統染織に関係あるものについて考察をする。

2. 麻

庶民の衣料や寝具として、麻は綿が普及するまで多く使用されており、県下の各遺跡より出土する土器や、布目瓦にそのこん跡をみることができが現物ではない。

現在当地方でみられる麻織物とその染色については、江戸時代後半から末期に製作されたとみられる、名古屋狂言共同社所蔵の狂言装束5百余点が、まとまった麻の染色品として非常に貴重な資料である。

これは徳川義直が慶長13年(1608)に尾張国一円を領地として將軍秀忠より与えられる。そして慶長19年(1614)名古屋城造営ができると、和泉流狂言の宗家の山脇和泉守元宣(もとよし)を召し抱えた。狂言の流派は大蔵流、鷺流が別にあるが、和泉流は禁裏御用も務めた。そして名古屋城内の御殿には能舞台があって、藩主の祝事等に能狂言が多く行なわれた事が、朝日重章の鸚鵡籠中記(おうむろうちゅうき)に記載されている。そして江戸時代には狂言は非常に発展し、宗家十四世の山脇和泉業(もとなり)の時代には、全盛となり、詞や型の定着をきめ、狂言装束の調達も多かったようである。しかし明治になり家元が尾張藩の禄を失なうと、生活の資として多数の装束や小道具が流出をした。これを当時の本町筋やその周辺の富有な町民により、集められ、また教養として、狂言を習うことが多かった。

そして明治24年に名古屋狂言共同社が設立されて、その装束類を受け継ぎ現在に至っている。この社中の方達はそれぞれ家業を持ち、傍ら狂言にも専念され、熱田能楽殿やその他で公演され、この装束が使用されている。

狂言の装束には、大名、小名が着用する素襖、長袴や

On the Traditional Fabrics and Dyeing in Aichi Prefecture

KINNOSUKE HORIE

Department of Polymer Engineering, Nagoya Institute of Technology.

名古屋工業大学高分子工学科 講師

図1 若松に蕨に雲取文様肩衣

太郎冠者、次郎冠者の着用する肩衣(かたぎぬ)、半袴などがあるが、いずれも麻布で裏地はつけない。これに染色加工がされた簡単な装束である。能が織物や刺繍、箔を使用して重厚で豪華な装束にくらべ、全く対照的である。狂言装束の染色技法は手描き、友禅、型染の技術が単独であったり または混合されたりして、染色技法は全く自由に構成されており、当時の染色方法について知ることができる貴重な資料である。

現在能狂言は非常に盛大になっているが、装束については演じられる曲目のものだけ遠くより鑑賞することになる。それで昨年には繊維学会中部支部が名古屋狂言共同社と昭和美術館主催で、狂言装束特別展を2ヶ月にわたって開催した。参観者は多数あって名古屋にこの様な染色品がかくも多数あったのかと、驚かれたりそのデザインの新鮮さや染色技法に感銘を受けられた。

また150年から200年経過している装束が、現在でも舞台上で着用され、激しい演出に耐えている麻布の強靱さや、染色性の良さに認識を新たにされたようである。和泉流の肩衣は、模様が黒地に白抜きになるのが基本でそのような装束も多いが、江戸時代末期になると、友禅、型染の技法を多くして、色彩は多くなり派手になる。とくに子供の肩衣は色彩が華麗で非常に美しいものが多い。

基本として使用する黒色は、油煙をにかかわ、えごま油でねり、刷毛引したり、型紙で摺りこんだ方法と、木附子(きぶし)や、びんろうじと鉄漿(おはぐろ)によるタンニン鉄によるものとがあり、藍の下染をされることが多い。模様を白上りにしたり、友禅するための糊おきの技術は非常に良く、白抜きのむずかしい麻布にくっきりと細く明瞭に白線を染めわけている。また糊おきの技術

雪持笹文様肩衣

者は日本画の運筆の心得があるようで、その線の強弱の筆勢を良く出しており、模様をよくとらえている。

友禅には顔料の使用も多く、それに植物染が併用される。そして肩衣のかたさを保つために、彩色仕上をした後に全体に糊を引いて布の織目をふさいでいるものもある。模様は四君子(梅、菊、蘭、竹)や松竹梅、牡丹、松、橘などが使用される。動物は、馬、猿、兎、蜘蛛、かまきり等が多い。器物として御簾(みす)、玩具、舟家、ノ縄などが使用される。また雲、波、雪も多い。雪は結晶が多いが、これは天保年間(1830~1843)に下総古河の城主土井許盛が雪花図説を発表した。これが染織の模様として多く採用され、当地の小田切春江の奈留美加多(なるみがた)にも記載されている。狂言の肩衣にも之がとり入れられて、共同社所蔵品の中にもある。

この肩衣は苧麻(ちょま)、大麻であって織密度はたて糸が1センチに15本~20本、よこ糸は1センチに13本~18本位である。透かしてみえる薄さである。

この肩衣も時代経過が大きいので、激しい動きの舞台での着用はもう限界にきており、少しずつの補修ではどうにもならない状態で、現在ではほころびや破れの少ない装束を取替えて使用している。また体格も江戸時代より大きくなった現在では合わない装束も多い。

これらの装束は県や市の文化財に指定されるものであるから、将来は完全保管することにして、現在筆者が共同社より依頼を受け、復元をしている。その試作肩衣は先きの装束展に出品をしたが、全く同じだと好評を得た。

この復元に当っては2つの方法をとることにした。一つは、染色方法は麻布について、自記分光光度計による色の分解や染色状態、また麻の種数や織度や織密度等に

について研究し、できるだけ復古の方法による復元と、他はこの肩衣が、藩主やその客の眼前で演じられた狂言で使用されるものであるから、当時の最高の染色技法によったものであるから、試作復元するのに顔料樹脂系の色材や、反応染料など使用して製作し、100余年も経過した時にどのような評価を受けるかと考えて現在の染色法と2様の方法で製作をすすめている。

麻布については、通産省指定の近江上布や当地の麻織する工芸グループの援助を得て、各種の試織をしている。この肩衣が全部当地で製作されたかどうかは、明治初年に狂言装束が散逸し、古文書も亡失しているので不明である。和泉流が京都と縁が深かったので京都で製作されたものも、多く含まれていると想像される。しかし当時これをみた当地の染色関係者には、良い研究材料であり、技法の向上に役立ったと考える。現在の名古屋友禅の業者の先々代は、この装束製作に関係があったかも知れない。肩衣は豊橋、新城市と同じく狂言が盛んであるから、それぞれ同様な装束を蔵して使用されている。模様や染色技法は大体において狂言社所蔵と同じである。

3. 綿

綿は類聚国史(るいじゅうこくし)に矢作(やはぎ)古河流域の幡豆郡福地町天竹に崑崙(こんろん)人が漂着して、綿種子を持参したことは良く知られている。木綿は16世紀初めには、この地方でも栽培されるようになる。当地方が温暖で適当な雨量もあり、また三河、伊勢湾より肥料にする小魚や干鰯が容易に得られた事にもよる。

図2 和漢三才図絵、木綿布

正徳3年(1713)に編集された寺島良安の和漢三才図絵の巻27には、三河と尾州木綿が記載されて、木綿の国内主産地の一つであった事がわかる。この地方では麦の収穫のあとに綿が作付けされ、秋には各農家は綿の取入れで多忙を極め、その額は年2万両にも達したといわれる。綿は繰綿で移出されたり、農家の婦女子が機織して、布として出荷された。この木綿布は名古屋の吹原家始め四軒の間屋がこれを取仕切り、藩に御用銀を納めて各地に移出をした。

綿が栽培されると同時に藍も作付けされた。藍は綿と同様に気象条件も肥料の必要性も似ており、この地方の地藍として尾州藍は有名であった。

木綿布と藍ができることにより、紺地の尾州紺、藍型染、絞りが産物として発達をした。尾州紺は藍染した糸で織ったものと、製布後に藍染したものがあるが、いずれも作業衣服、日常衣、布団地等になり、その使用は非常に多かった。また各地に移出することにより藩はそれに課税したので、藩財政に寄与することが多かった。

この藍染は紺屋が勝手に営業することは江戸時代では固く禁じられ厳しい制限を受けた。これについては尾州濃州紺屋惣帳(こんやそうちょう)があって、藩制時代の紺染業の形態を知ることができる。尾張藩の紺屋の元締は小坂井新左衛門によって統制される。そして配下の1260余軒の紺屋は、職法定(しょくほうさだめ)により、藍瓶の増減、職札の売買、年季弟子の召抱え、家業引継ぎ等にも、それぞれ許可を必要とした。また新規の紺屋開業には年季弟子が10年無事故勤務したもので、許可されても3年間は藍瓶8個に限定されていた。

この小坂井家は義直が藩主になると駿府より共にきて、藩の朱印状を得て紺屋の元締となり、藩の御用染屋にもなる。前述した多くの紺屋はそれぞれ土地の有力者が兼業し、有松を始め、知多、一宮、津島方面には地域的に多く集まっていた。この紺屋は小坂井家統率のもとで、各村落の庶民の監視と情報を集めて見張りし、藩制に一役買っていたことも充分考えられる。絞りは有松、鳴海の東海道筋に発達して、江戸時代の街道の土産として有名になり、多くの間屋もでき、周辺農家の婦女子の仕事として発達し、多くの絞り技法もでき、現在に引継がれている。

絞りが奈良時代から引続いて行なわれ、桃山時代から江戸時代初期にかけて、辻が花染ができ衣服の模様構成に影響を与えている。

絞りと描き絵の辻が花染の語原は、諸説あるが当地にこれが有松、鳴海絞と結んで関係ありとする説を桜井清香氏がたてている。これは熱田神宮南門の八剣宮の近くの町を辻が花町といわれており、この道を南へ行くと鳴海と有松へ続く。熱田神宮享禄古図(1528)には神宮前

図3 東海道鳴海宿の絞り店と商標

に魚市場が画かれ、その一部に布様のものを干す場面がある。この地域は曾曝女(そぶくめ)という地名で、これが辻が花染に関係ありとされ、辻が花染は神宮の手仕事ではないかとされている。

内藤南甫の張州雑志(ちやうしゅうざっし)は尾張藩内の各種の記録であるが、文中に辻が花染の説明があり、その中の人物画は前記の古地図中の人物が画かれている。このような事から、熱田-辻が花染-有松、鳴海絞と関係づける説も出てくる。

辻が花染の何点かが徳川美術館にも所蔵されている。有松、鳴海絞りはこのような絹布や上布への絞りでなく、始めは地織の麻に藍絞りをした簡素なものが、木綿布の出ることにより、浴衣など庶民の染着として発展したものである。江戸時代の司農監(大代官)の樋口好古の尾張徇行記(おわりじゅんこうき)には有松村について次のように記述している。「略、此村東海道ニアリ 元桶狭間ノ支邑(えだむら)ナリ。慶長十三年申年ニ始メテコ、新町ヲ造立シ、其此ヨリ里民絞木綿ヲ仕出シ旅客へ販キ

生産トス。一略一 左右ノ家コトニ絞木綿彩色ヲ種々染粧ヒ 干頭ニカケ店ニ飾リ甚奇麗ナリ、今ハ縮緬絞リナドニ仕出シ旅客何レモ足ヲ留メテ買求メ……」とあって絞りが多く生産され、絹絞りに仕事も拡大したことがわかる。絞りの種類は括り絞、巻上絞、縫絞、桶絞、板締絞があり、括り絞には、鹿子絞、羅仙絞、三浦絞、みどり絞等がある。巻上絞には皮巻絞が知られ、帽子絞、蜘蛛絞、嵐絞がある。嵐絞は百余種も絞り法がある。縫絞には平縫絞、折縫絞、縫養老、白影絞などに分類できる。こ

の多くの絞りを組合せるとまた、多種多様な絞りができ変化が著しい。

現在ではこれらの技術のうち忘れられるものもできたので、地元の有志によって、いろいろと復元が試みられ、また多くの人が関心を持つようになってきている。藍型染は江戸時代の一般庶民にとっては、最もなじみの多いものである。これは当時何回も出された御触書の布令で、百姓、町人の絹の使用は禁じられ、衣服は従来の麻の外に木綿が主力になった。そしてこれに藍染による型染が非常に多く行なわれた。この型紙は伊勢白子方面で彫られ、型売商人によって、全国に売られたので、地方色の濃い柄は少なく、良く出る型紙をまた売歩くためこれに関しては似たような型染布が各地よりでている。そのデザインも菊、牡丹、松、竹、梅、鶴亀に唐草をとり入れた吉祥文様が多い。型紙の長さ方向は20センチ位で模様が繰返しになることが多い。しかし唐草など左右上下に転回する枝の連繫をうまくして、着尺、布団柄に大きくまとめた時に、あまり不自然さを感じない構成になる。

図4 藍型染 2重菊唐草文

藍型染 8重菊唐草文

図5 尾張名所図 結城織屋の図

当地方の有松周辺では浴衣の絞り染の仕事の済んだあとの期間にこの唐草染の仕事をしたといわれている。

型染には片面糊置と両面糊置のものがあり、型ずれなどかなりある染布もあるが、単価の安さと職工の不馴れなどもあり、稚拙なものも多い。

藍染以外にログウッドなどの使用もあって明治期のものには非常に黒味の多いものもある。そして弁柄や黄土を使用して、大豆汁でねり、にかわ液をまぜてすりこむこともされている。

現在愛知県では紺屋は蒲郡市の遠山氏が藍染を続けているが 作家として藍をたてている人もかなりある。

木綿縞は棧留縞(さんとめじま)、結城縞、佐織縞、寛大寺縞などと共に三河縞がある。三河縞は現在でも工場生産される木綿縞で、当初は農家の自家用地織であったのが、生産されるようになったもので、たて糸で縞割をして、よこ糸の藍染糸を打ちこむ、幅に2つか3つの縞割があるもので、細縞は少ない。これに緑、茶、黄、黒などの縞割をするもので布団柄や日常衣に使用された。現在は藍染でなく硫化やナフトールが多い。そしてよこ縞なども入り、縞全体も細かくなっている。

4. 刺 繡

当地方の刺繡は呉服縫、仏前用打敷、祭礼用飾物、舞台衣裳、輸出向製品などである。仏事用の刺繡は本願寺別院もあり、数多く生産され、業者も名古屋市内だけで150軒余もあったが、戦後は非常に少なくなっている。

この刺繡の非常に立派なものが名古屋市内に保存されている。これは光明院という曹洞宗寺院にある刺繡涅槃絵である。この寺院は市内中央部を

南北に流れる堀川と、桜通と交叉する南西の一区画が戦災を免れたがその中にある。涅槃絵(ねはんえ)は2月15日に釈迦が跋提河(ばだいが)のあたりの沙羅双樹の下で入滅した時に菩薩や羅漢や信者が周囲を取りまいて、嘆き悲しみ、号泣する姿があり、下部には多くの動物がうなだれている様子が示されている。上部には切利天(とうりてん)よりはせ参ずる仏母摩耶夫人与童子が画かれるものが多い。そして2月15日を涅槃会(ねはんえ)として各寺院は本堂にこの画を掛け、供物、花を飾り諸人が参詣する習慣がある。

この涅槃絵の古いものは、金剛峰寺の応徳3年(1086)のものが知られている。当地の各寺にも多くあるがいずれも絵画であって、光明院蔵のように刺繡涅槃絵は珍しい。製作は延宝8年(1680)である。

筆者の知るもので刺繡涅槃絵は群馬の大雄院にあるが、これは宝永2年(1705)の作である。繡仏は奈良時代より江戸時代までに数多く製作されているが、刺繡涅槃絵のように多数の人物、動物や樹木を刺繡したものは少な

図6 刺繡涅槃絵 釈迦如来の図

図7 刺繡涅槃絵 沙羅双樹と雲

い。

光明院蔵のこの刺繡は、たて2.3メートル、よこ1.8メートルの画面でこの周囲に20～30センチのふちがつくので大きな掛軸になり、本堂の上方から吊っており、全体はかなり離れてみなければ全量がみえない。そして大変に壮麗で迫力ある刺繡である。

本尊の釈迦は頭北、面西にして右手を曲げ枕にする姿勢、ほぼ体をのばし蓮台を枕にし、両手を体につけるか右手を軽く曲げる姿の2種類あるが、光明院のは後者の姿である。これは保存は良いが一部の金糸のとじがはずれ、絹地がところどころ破損していたので、昨年筆者が部分補修を行なった。

釈迦は全身が金糸を使用している、さん然と輝き、まばゆい位で300年も経過しているとはみえない。後者は平縫、さし縫、すが縫、色糸のこまとじを使用し、人物の眼や口はすみ書である。動物、樹木もそれぞれ平縫、さし縫をして周囲を色糸の太いのでとじてあり、非常に密な仕事かしてある。動物の姿態は熊野権現の縁起絵(えんぎえ)の中の熊野御本地絵巻の中にある動物とよく似ている。この絵巻は印度古代の王妃と動物の物語であるから、仏典に関係があり製作されたと思われる。

この他に知多市や荒子町に祭礼の時の飾り馬の馬道具の刺繡がある。知多市のものは日長神社の4月の祭礼に使用するもので、緋羅紗地に金糸や色糸の太より絹糸をとじたものと、色糸でさし縫をしたものなどあり、竹と虎、武者絵、御所車、など刺繡されている。裏面はさらさ地が使用しており、江戸時代後半に長崎方面から入荷したものの使用であろう。保存は良く完全に揃っている

ので見事である。当地の打敷を製作する刺繡業者により作られたものとみられる。

5. おわりに

愛知県の伝統染織のうち、絹や毛織は別にして従来あまり知られていない麻、刺繡について述べ、また木綿の絞り染についても考察を行なった。ここに記述したのはまだ一部分であって、寺社や旧家に保存されている染織はまだあるが、これらについては別の機会に説明したい。

愛知県内の各種の繊維製品については、長い間多くの人達が従事して築き上げたもので、伝統染織の各種もこの上でできたものである。本稿では染織文化財の面に説明を多くしたが、これも伝統染織の記録や製作の方からも重要と考えて述べたものである。

文 献

本稿については下記の著者を参考にした。記して厚く感謝する。

- 1) 森徳一郎：「尾西織物史」、尾西織物同業組合(1939)
- 2) 愛知実業教育振興会：「愛知特殊産業の由来、上、下」：愛知県学務部教育課(1942)
- 3) 樋口好古：「名古屋叢書続編。尾張御行記」、名古屋市教育委員会(1965)
- 4) 朝日重章：「名古屋叢書続編。鸚鵡籠中記」、名古屋市教育委員会(1965)
- 5) 城戸久：「名古屋の史跡と文化財」、名古屋市教育委員会(1970)
- 6) 堀江勤之助：「江戸明治藍の手染」、愛知県郷土資料刊行会(1976)
- 7) 堀江勤之助：「有松鳴海絞」、名古屋鉄道株式会社(1978)
- 8) 堀江勤之助：「藍染と唐草模様」、中日出版社(1978)
- 9) 堀江勤之助：「鳴海絞」、鳴海絞商工協同組合(1978)
- 10) 堀江勤之助：「図説名古屋の狂言装束」、自費出版名古屋市教育委員会出版助成による(1980)
- 11) 堀江勤之助：「三河稿」：中日出版社(1982)

(昭和58年1月3日受理)